

Café des open



三浦一族

Menu 第7回

承久の乱と三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

建保7年（1219）正月、将軍源実朝が、鶴岡八幡宮で前将軍源頼家の遺児公暁により殺害されるという衝撃的な事件が起きました。朝廷と幕府との良好な関係を構築してきた実朝がいなくなったことで、それまで保っていた両者の関係は急速に悪化していきます。そうしたなか、摂津国長江荘と倉橋荘（大阪府豊中市付近）をめぐり、後鳥羽上皇（以下、上皇と略す）と執権北条義時が対立し、上皇からの地頭職罷免要求を義時が断ったことなどをきっかけに義時追討の命（院宣・官宣旨）が下り、承久の乱が勃発しました（承久3年〈1221〉）。

上皇方は近臣らを大将に命じますが、この中に、三浦義村の弟の胤義（たねよし）がいました。胤義は、兄の義村を味方につけることを約束し、義村に密書を送ります。義村と弟の胤義は和田合戦などで行動を共にしてきましたが、胤義はその後上洛し、都の治安維持を行う検非違使（けびいし）をつとめていました。また、胤義の妻は、源頼家の妻であった一品坊昌寛（いっほんぼうしょうかん）の娘で、頼家との間には子がいましたが、謀反の疑いをかけられ、義時によって自害に追い込まれていました。胤義が鎌倉方を離反した背景には、こうした処分を行った義時への反発があったとされています。

さて、胤義が送った密書が義村のもとに届くと、義村はただちに義時に報告します。さらに、義村は胤義の使者から他にも鎌倉に密使が送られているとの情報を聞き出し、潜伏する上皇方密使の捕縛を進言します。上皇方は、頼りとしていた義村の調略に失敗し、さらに朝廷からの官宣旨も、ことごとく御家人らの手元に届く前に幕府側に回収される結果となったのです。その後、鎌倉では、有名な政子の御家人らへの訴えもあり、幕府勢は一致結束し、都に向け出陣を開始しました。やがて大軍となった幕府勢は、尾張・美濃での合戦に勝利し、一気に都に押し寄せます。上皇方は、瀬田（滋賀県大津市）や宇治（京都府宇治市）などで、都への侵入を阻止する最後の抵抗を行い善戦するものの、大軍の幕府勢に突破されました。胤義は、戦っていた瀬田から都に戻り、上皇に最後の戦いに臨むことを訴えますが、門前払いされます。それだけでなく、上皇は幕府勢に使者を送り、義時追討の院宣の撤回を行い、今回の挙兵は一部謀臣によるものと責任転嫁したのです。

上皇の後ろ盾も無くなった胤義は子息らとともに、東寺（京都市南区九条町）に籠もり、幕府勢を迎え討ちました。攻め手は、三浦や佐原の軍勢であり、一族同士での戦いとなりました。胤義は、兄の義村を見つけると、裏切られた嘆きの思いを伝えます。これに対し、義村は

愚か者と話しても無駄であると言いつち、取り合いませんでした。東寺での戦いは、双方の従者が数多く戦死するほど激しいものであったようですが、最後、胤義父子は西山の木嶋神社（このしま



木嶋神社

じんじゃ・京都市右京区太秦森ヶ東町）に移り、ここで自害して果てました。乱後、上皇方の武士が次々に捕えられ殺害されていくなか、胤義の首は、兄の義村から北条泰時へと差し出されました。

さて、この承久の乱では、胤義にまつわる別の悲話も伝えられています。胤義の5人の子たちは、矢部（大矢部・小矢部付近）の地で祖母に育てられていましたが、義村は自身の郎等を通じて子供たちを差し出すよう命じます。祖母は必死に命乞いをするものの、11歳の子を除き、幼い4人の弟たちは許されず召し出され、田越川の河原で斬首されました。この悲劇を伝える「忠臣三浦胤義遺孤碑」が、逗子市内に残されています。しかし、この話は、後に創作されたものとみられています。この逸話は、『承久記』に書かれていますが、この史料は異本が多いことで知られます。『承久記』で最も古い成立とされる「慈光寺本」には、この悲話に関する記述は一切書かれていないことなどから、のちの時代に創作されたものと考えられているのです。

一方、承久の乱で手柄のあった義村・泰村父子は、西国にも所領や權益を伸ばしていきます。義村は、鎌倉幕府で御厩（みまや）の管理を行う御厩別当の地位にありましたが、乱後、泰村も、院の御厩の実務を担う案主（あんじゅ）となるなど、三浦氏は、東国だけでなく都における馬の供給にも関わるようになりました。さらに、泰村は筑前国宗像社（むなかたしゃ・福岡県宗像市）の預所職及び肥前国神崎荘（佐賀県神崎市）の地頭職を得ます。これらは大陸との繋がりを有した地であったことから、この後、三浦氏は日宋貿易にも関与していくようになります。

（参考文献）

上杉孝良「『承久記』私考 — 「三浦胤義の子供、處刑の事」について —」（『三浦一族研究』3、1999年）